

【調査実習報告（教員）】

天草富岡城における復元整備の経緯と問題点

大平 晃久（国際文化講座教員）

I はじめに

富岡城^{とみおかじょう}は、熊本県天草郡^{あまくさ}苓北町^{れいほくまち}に所在する近世初期の城郭である（図1）。この城は、原城^{はらじょう}（長崎県南島原市^{みなみしまばら}）と並び、島原・天草一揆（1637～38年）の遺跡として知られる。島原半島に続いて天草で勃発した一揆が標的としたのが唐津藩支城^{からつ}の富岡城であった。そしてこの城の歴史的意義は「…もしこの時一揆軍が、犠牲を覚悟で攻めこんだら籠城軍は防ぎきれなかったかも知れない。そうになったら、島原・天草の乱は違った形で終焉したであろう」¹⁾と述べられるように、決して小さくない。

しかし、富岡城と原城は、歴史遺産として対照的な状況にあるといえる。原城は島原・天草一揆終焉の場として国史跡の指定を受け、世界文化遺産を目指す「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産候補になり、城は破却された状態で維持されている。一方、富岡城は一揆の後に改築された姿に完全に復元整備され、島原・天草一揆の遺跡であることはほとんどアピールされない。

本稿は、主として富岡城に関する各種報告書など苓北町の行政資料や新聞報道によりつつ、まず、富岡城復元の経緯を示す。1670年あるいは71年に当時の富岡藩主戸田忠昌によって破却された富岡城は、1999年から苓北町によって復元整備が進められており、その経緯を追う。ただし、こうした歴史遺産の復元は、復元整備の技術的な側面や歴史観をめぐって議論の対象となってきた²⁾。すなわち2点目として、富岡城復元整備の過程で示された様々な問題点、具体的には城の完全復元がはらむ問題や、復元された富岡城における島原・天草一揆の否定的な扱いなどを考察する。歴史遺産の復元整備は、記憶の重層を否定し、場所の意味を単純化することに他ならない。富岡城においてそのことを具体的に見ていきたい。

II 富岡城とその城下町

考察に先立って、富岡城と富岡城下町の歴史地理について概略を示す。以下、特に示さない限り、富岡城と富岡城下町に関する一般的な記述は『富岡城跡物語』³⁾による。

図1からも明らかなように、

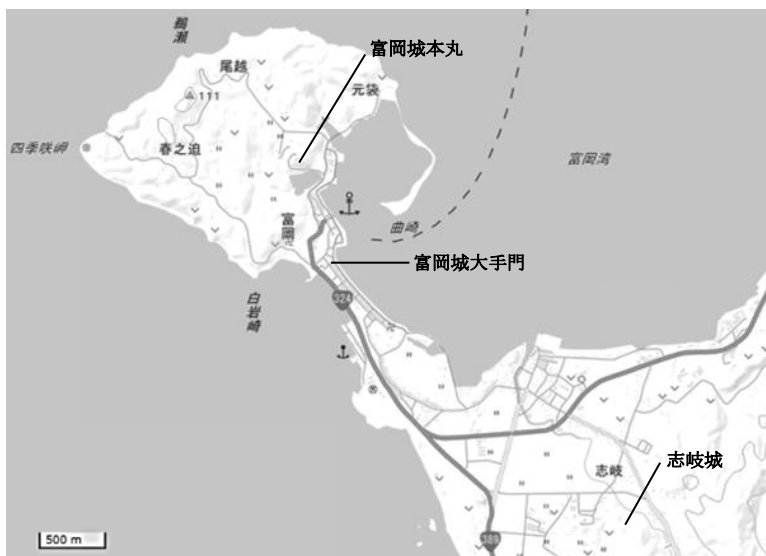


図1 富岡とその周辺
地理院地図に加筆。

富岡城は陸繋島の富岡半島上に位置し、城下町は砂丘（陸繋砂州）上を中心として、富岡半島と天草下島本島の双方に発達する海岸段丘上にも広がっている。砂丘によって東シナ海から隔てられた内側（東側）に、さらに砂嘴が細長く伸び、富岡港はその懐に抱かれる格好になっている。戦国期まで、この地域の政治的な中心はやや内陸の志岐城であり、富岡にはその支城が存在したものと考えられている⁴⁾。

近世に入ると、天草は唐津藩（寺沢氏）の領地となる。唐津藩は 1602（慶長 7）年から富岡に天草統治の拠点として城郭を建設するとともに、城下町を形成した。寺沢期の城下町絵図として、二つの時期の異なる図が知られる⁵⁾。それらを見ると、城の大手門が船着場に直接面していること、現在の袋池は小さな湾入になっていること、また、城下町はかなり狭いこと、二つの絵図が描かれた間に城内から町家がなくなり、その分、城下町が南の「冬切」とよばれる付近まで拡大したことなどが読み取れる。

1637（寛永 14）年 10 月に島原・天草一揆が起こると富岡城をめぐる戦闘が起こり、この時に城下町も焼失した。一揆の終焉後、唐津藩主寺沢堅高は失政の責任を問われ天草を収公され、その後自殺して寺沢家は断絶した。

1638 年に山崎家治が備中成羽から 4 万石で入部し、城郭の大改修、城下町の拡張・整備を行う。山崎期の城郭や城下町を描いた絵図はなく、文書のみが手掛かりとなる⁶⁾。入江を仕切り一部の武家地を水没させて外堀の袋池を造成し、段丘上（寺沢期の絵図では「上町」）の町人地を武家地（「おかし町」との伝承）とした⁷⁾。また、寺沢期の絵図で砂丘が細くくびれたように表現されている「冬切」⁸⁾には砂丘を横切る掘割がつくられ、大手門が設けられた。城下町（町人地）は大手門以南の砂丘上へと拡大している。

1641 年、山崎家治は城郭や城下町未完成のまま讃岐丸亀へ転封となり、天草は天領となる。代官として着任した鈴木重成は善政で知られ、天草の石高半減を幕府に働きかけ、聞き入れられないとみて抗議の自殺をしたとされる⁹⁾。また、軍事面は肥後藩が担当し、肥後在番衆が上町の武家屋敷跡に入った。この時期、大手門のかなり南の段丘面北端には寺社が次々と建立され、「寺町」とよぶうる地区が形成されている¹⁰⁾。

この前期天領支配の後、1664（寛文 4）年に三河田原から戸田忠昌が 2.1 万石で入部し、城郭・城下町の整備を再開することになる。しかし、戸田忠昌は 1670 年あるいは 71 年に、口伝では「天草は永久に天領たるべきの地」と幕府に建議して城を破却し¹¹⁾、1671 年に領地を関東に移され、富岡は再び天領となるに至った。

この戸田期の城郭を知る手掛かりとして城絵図（「肥前甘州富岡城図」）がある。これは、城郭内の建物が数多く描きこまれ、袋池水面からの石垣の高さなども記入されていることから、破城前の実測図と考えられている。この他に山崎期以降の富岡城・富岡城下町について具体的に知ることのできる絵図史料としては、のちの天領期（1823 年）の絵図 1 枚がある¹²⁾。これらに他の資料を加えて作成した戸田期の城下町復原図（図 2）には、海岸段丘面と砂丘からなる地形に対応しつつ、一部は地形改変を伴って、段丘上（一部盛土、削平）に武家地、段丘下と南の砂丘上に町人地が立地する様子を示した。

1671 年からの後期天領期に陣屋は三の丸におかれた。当初は独立した代官が所在し、熊本藩から在番衆が派遣されるものの¹³⁾、後には行政上は島原藩預けや日田郡代支配、長崎代官支配に移り、富

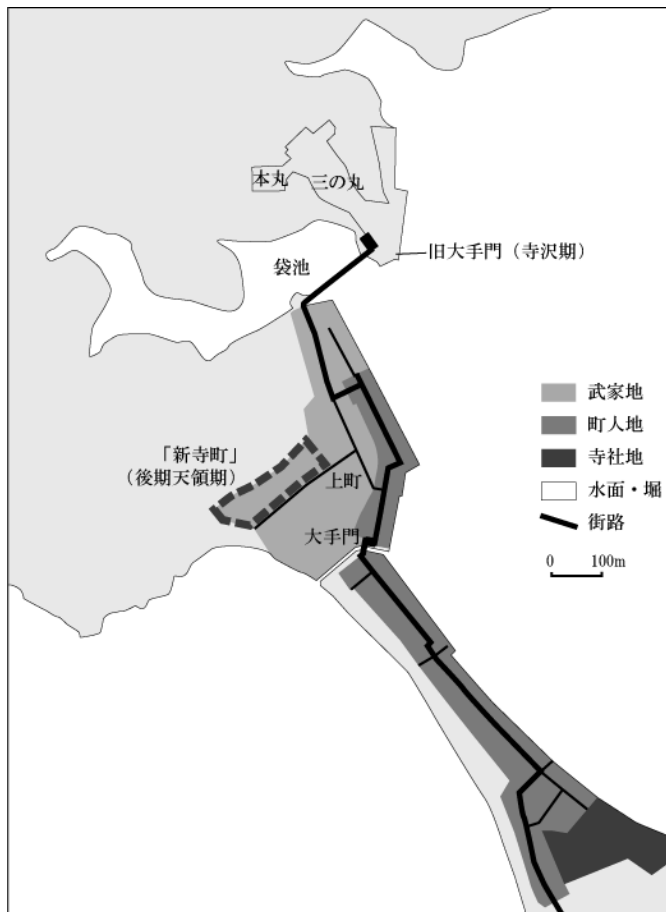


図2 戸田期富岡城下町復原図

各種絵図や史資料、明治期の地形図などから作成。上町は「おかち町」であったと伝えられているが、位置的にも面積的にもすべてが足軽屋敷であったはずはなく、一般の武家地として示した。上町から袋池へ向かう街路沿いは現状では細長い段丘状になっているが、寺沢期の絵図では道が繋がっておらず、山崎期以降の人工的な削平・盛土面と判断されようか。なお、「肥前甘舂富岡城図」には城の搦手側（北西側）に特段の施設は描かれていないが、寺沢期には武家地であること、城の防御上搦手側にも何か設えがあると思われることから、武家地があったと想定したい。「肥前甘舂富岡城図」は三の丸の屋敷を空白で描くなど、狭義の城郭以外は描写しておらず、同図に描かれない武家屋敷などが城の周囲にあることは十分考えられよう。

岡陣屋は出張陣屋化するとともに、熊本藩の在番も解かれることになる。城下町を見ると、武士層が在番衆や少数の地役人などに限定されるために武家地は段丘上（上町）の一角に大幅縮小され、また武家地の縮小を反映して「寺町」から旧上町に寺院が集団移転し「新寺町」が形成された¹⁴⁾。一方、商業の発達に伴って町場は拡大を見せている。天領となった富岡は、山崎、戸田期に形作られた近世城下町を基盤に、陣屋を核とするいわば「準城下町」へと転じたといえよう。

Ⅲ 富岡城復元の経緯とその問題点

(1) 復元の経緯 戦後の富岡城跡をめぐる開発、そして復元の経緯について見ていく。

天草の一部地域は1955年に天草国定公園に指定され、1956年に同公園は雲仙天草国立公園に編入された。富岡城跡は雲仙天草国立公園の第3種特別地域に含まれるとともに、観光施設整備が行われることになる。すなわち、1960年度に二の丸展望台、1969年度に本丸展望台が設けられ、1970年度には郷土資料館が城跡北側に開館した¹⁵⁾。またこの間の1963年には城址入り口に天領時代の代官である鈴木重成の銅像が天草新聞社長田中沢治によって建てられている。そして1972年8月24日付で「富岡城址」として苓北町の文化財に指定された。

1982～85年に、富岡城跡の文献資料と、現地遺構の双方にわたる本格的な調査が文化庁の補助を

受けて行われた。この調査の結果は大部の報告書として刊行されている¹⁶⁾。

その後の1988年以降、観光開発を主目的とした整備計画が浮上する。1990年6月の新聞報道には「平成10年度をメドに富岡城跡地に当時の天守閣や本丸櫓など、城の復元も計画、町観光振興の目玉にしたい意向だ」とあり、富岡城にはもともと存在したことの無い天守建設までもが構想されている¹⁷⁾。ただし、実際に「富岡半島観光開発ビジョン」（1991年3月）に盛り込まれた計画は、木造で「史実に忠実に復元」とするという穏当なものであった¹⁸⁾。

復元計画が具体化するのには、1991年1月就任の田嶋章二荅北町長のもと、富岡城復元基本計画策定委員会が組織され、Ⅱでも触れた戸田期の城絵図「肥前甘舂富岡城図」に基づく復元が構想されてからである。『富岡城復元基本設計報告書』（1995年）では、完全復元を選択する理由として次の5点があげられている¹⁹⁾。ここでは③に注目しておきたい。

- ①現況遺構と絵図を比較した場合、絵図の内容と現況が極めて良く合っており絵図の信憑性が高いと考えられる。
- ②遺構の残り状態も良好な所が多く、発掘調査を今後進めれば、当時の状況がかなり推測されると考える。
- ③天草唯一の近世城郭として当時の城の再現をすることで、町民により深く郷土への誇りと愛着を啓発することが可能である。
- ④次世代への郷土の生きた歴史教育の場として大きく寄与できる。
- ⑤歴史公園として多くの町民に親しまれているが、城跡を整備することで遺構の保護と歴史の公開に大きく寄与される。

1995～98年には発掘調査が行われ、「肥前甘舂富岡城図」の正確さが裏付けられた。それに基づいて、1999年から石垣や建物の復元整備が行われた。そのうち本丸石垣は電源三法交付金を利用して²⁰⁾、また、二の丸石垣は農林水産省による中山間地域総合整備事業の農村公園施設整備として²¹⁾、出丸は熊本県の地域起こし事業を利用して²²⁾、それぞれ復元整備が行われている。一方、建物について見ると、本丸の多聞櫓は熊本県富岡ビジターセンターとして木造で建設（2003～04年）され、本丸南東隅櫓と城門は過疎債を発行して木造で整備された²³⁾。その後、2005年度からは、国土交通省によるまちづくり交付金制度（現在は都市再生整備計画事業）を利用して²⁴⁾、二の丸隅櫓や築地塀をはじめ、歴史資料館（2015年7月、二の丸長屋を木造で復元）、アダム荒川の記念広場²⁵⁾の建設などが行われた。2017年現在もこの事業の一環として、大手門、追手門、出丸櫓の整備などが行われている²⁶⁾。

荅北町の田嶋章二町長は富岡城跡の復元整備に非常な熱意をもっていることを明かしている²⁷⁾。そのような町長のリーダーシップのもと、ここまで見たように国などの補助事業を、積極的に、また巧みに活用することによって、急速に富岡城跡の復元整備がすすめられてきたといえる。

(2) 復元技法に関する問題点 以下では富岡城復元の問題点を、復元整備の技法に関する問題からみていきたい。

富岡城の復元に当たって、石垣は「肥前甘舂富岡城図」に描かれた山崎・戸田期の状態にほぼ完全に復元されている。しかしながら、これは戸田忠昌による（そして幕府も了承した）意図的な破却というこの城の来歴を無視したものに他ならない。富岡城は廃城後に徐々に崩壊したわけではなく、明確な意思をもって、しかも当時の城主によって破却されたことを考えると、破却された状態が富岡城の城郭としての最終的な形であるとさえいえよう²⁸⁾。さらに、復元された石垣を見ると、オリジナル



図3 富岡港内の船上から望む富岡城

2016年撮影。

の石と新たに積まれた石は現在のところは見分けがつくものの、年月が経てば新旧の区別がつきにくくなるように思われる。オーセンティシティの観点からこれは好ましいとは言えない。

なお、意図的な破却を受けた城郭の整備の場合、全面復元という手法は一般的ではない。近隣の例を見ると、原城では、城が破却された状態を展示するために、石垣から落とされた石や土砂を取り除いたうえで石垣上部の土砂の崩落を防ぐ工事を行ったり、地点によっては破却された状態のまま保存したりする手法がとられている²⁹⁾。これは富岡城と同じ熊本県内の破却を受けた城である佐敷城さしきじょう（葦北郡あしきた芦北町あしきたまち）でもほぼ同じである³⁰⁾。

名護屋城なごやしやう（佐賀県唐津市）の場合は、同様に破城を展示するエリアと、当時の状態に復元して展示するエリアに区分して整備が行われている³¹⁾。原城跡、佐敷城跡は国指定史跡、名護屋城跡は特別史跡であり、より注意深い整備が行われた結果であるが、それらにみられる整備手法は富岡城跡にも当然通用する考え方であるといえる。

次に、このように城郭を完全復元する一方で、城下町には比較的無関心であることも指摘できる。すなわち、城下町部分には歴史に関する解説板や案内標識類がそもそも少なく、さらに複数の時代が十分な説明もなく混在し、見学者に混乱を引き起こしている。2016年12月現在、城下町には、大手門以外では「鈴木代官屋敷跡」、「向陽山鎮道寺（勝海舟の落書き）」、「遠見番・山方番役宅跡」、「上町・下町・勢溜」（寺沢期と明記）、「雲龍山瑞林寺および供養碑」の5か所のみ歴史にまつわる解説板が設置されていた。このうち、「鈴木代官屋敷跡」（前期天領期）、「向陽山鎮道寺（勝海舟の落書き）」・「遠見番・山方番役宅跡」（ともに後期天領期）は復元された城郭とは時代が異なり、山崎・戸田期にはその地点に存在しなかったものである。しかし、そうした存続時期の違いに関する説明は十分とはいえず、城下町の姿を理解するのは難しい。城の復元対象時期である山崎・戸田期の城下町について何か書かれた説明板は大手門以外にはなく、城の復元と城下町はほとんどリンクしていないといえる。

3点目に、城内の建造物に関する問題がある。富岡城内に「肥前甘州富岡城図」をもとに建てられた櫓や長屋（歴史資料館）などは、詳細な寸法が分かる資料が残されていたわけではないため、厳密な意味での「復元」ではなく「復興」櫓などと称すべきであるが、いずれも本格的な復元を志向して木造で建てられた。しかし、これらの建造物にはガラス戸・サッシや自動ドアが目立ち、率直に言えば、木造にする意義はあったのか疑問を感じる。城郭研究者の加藤理文は富岡城本丸櫓（ビクターセンター）を誤って「RC造」と紹介しているが³²⁾、そう間違うのも無理はないかもしれない。

(3) 復元と歴史観 ただし、復元に関する問題はただ技術的な側面だけではなく、歴史観に関わる部分が多い。葦北町の田嶋章二町長は富岡城復元計画を受けた新聞のインタビューの中で、富岡城復元が「史実に忠実」であることを強調している³³⁾。確かに、現在の富岡城の復元が、「肥前甘州富岡城図」というかなり詳細な史料に依拠しているという意味で、「史実に忠実」という評価は可能

である。問題はどの史実、どの時代を重視するのかという歴史観にかかわる部分にある。

富岡城は「肥前甘州富岡城図」に基づき、山崎期～戸田期の姿に復元された。すなわち、富岡城の歴史の中で、山崎期～戸田期に最大の価値を認めるとともに、寺沢期～島原・天草一揆期、後期天領期に対してはそのような価値を認めないという選択をしたことになる。山崎期～戸田期は富岡城が城郭として完成に近づいた時期ではあろう。しかし、上述したように、戸田氏自身による城の破却という来歴は決して無視できるものではない。また、ナショナル・ヒストリーの上にこの城を位置付けるとき、おそらくは、島原・天草一揆が最も名を知られた事件であろうが、そうではなく、城持大名の所在というむしろローカルな過去が「郷土への誇りと愛着を啓発する」ものとして選び取られ、復元という形を与えられたといえる。

島原・天草一揆期に主眼を置いて富岡城の現状を確認しよう。復元された城内で島原・天草一揆に関する展示は限られている。歴史資料館やビジターセンターの館内には一揆の説明は見られるものの、一揆に関する石碑や銅像の類はない。二の丸石垣の復元整備工事の過程で、島原・天草一揆時の戦闘の痕跡らしきものが見える石垣が、一揆後に上から二重の石垣で封印されているのが発見された³⁴⁾。この石垣は一部が見えるように露出展示され、解説板も設けられている。しかし、露出展示部分の三重の石垣があまりに整って組まれていて、一見すると石垣の変った折れのように見え（図4）、また解説板にある復元工事中の写真とは違い過ぎていて、解説板を見ても同じ石垣であることが伝わりにくい。また、城全体の案内板にこの石垣は記載されておらず、来訪者の誰もが通るルート上にあるわけでもないため、この石垣の存在自体が気づかれにくい。結果として、富岡城を訪れても島原・天草一揆の現場であることはほとんど感じられない。富岡城のキリシタン関係の記憶は、城郭の北側ふもとに設けられたアダム荒川の記念広場³⁵⁾に封じ込められた感がある。

富岡城は、山崎氏と戸田氏による改築によって島原・天草一揆の痕跡が消された時期の姿に復元されたといえる。あるいは、一揆の記憶がともなう暗さのない、明るい城が志向されたともいえる。荅北町の田嶋章二町長は「富岡城が落城していたら、徳川政権の安定も成立せず、ひいては今日のような日本は形成されなかった」と述べている³⁶⁾。島原・天草一揆を明確に否定的に位置づけるとともに、その後のパクス・トクガワーナ、そしてそのローカルな表出である山崎期～戸田期の富岡城を強く肯定する語りであるといえよう。



図4 島原・天草一揆時の痕跡の露出展示

右奥の部分が島原・天草一揆時の痕跡を残すとされる石垣だが、解説板があっても極めてわかりにくい。2016年撮影。

また、山崎期～戸田期への復元は同時に、後期天領期の陣屋を核とした準城下町としての長い歴史を否定することでもある。富岡の歴史において制度的な意味での城が存在したのは近世初頭のわずかな期間に過ぎない。後期天領期を重視し、破却された城郭ではなく三の丸に陣屋を復元整備するという選択肢もあっただろう。

それに関連して付言するなら、富岡、あるいは荅北町において最も顕彰の対象になっている過去の人物は、前期天領期の鈴木重成代官であり、富岡城二の丸には鈴木代官のほか彼の兄である鈴木正三和尚らの銅像が建てられている³⁷⁾。上述

したように、鈴木代官は天草領の年貢半減を訴えて抗議の自殺をしたと語られる人物で、領民の負担を軽減し善政を敷いたとして天草各所に彼をまつる神社や祠がある。この鈴木代官を顕彰するのであれば、同様の負担軽減策として「城塞の維持修覆の爲めに蒙むる郡民の過重な負担を根絶せる賢明の策として、今に称ふるところなり」³⁸⁾と述べられるように高く評価されてきた戸田忠昌による富岡城の破却を重視せざるを得ないのではないだろうか。鈴木重成代官の顕彰と山崎期～戸田期の富岡城の復元は本来は両立せず、鈴木代官を評価するなら破城後の後期天領期をも評価するのが自然であるように思われる。

IV おわりに

本稿は、熊本県天草郡苓北町の富岡城を対象とし、戸田期（1664～71年）を中心に城下町の景観復元を試みたうえで、城郭の復元整備の経緯を整理し、島原・天草一揆との関連に注目しながら復元整備のあり方を考察した。

富岡城は1999年以降「肥前甘州富岡城図」に基づき山崎期～戸田期の姿への復元整備が進められている。しかし、その過程では意図的に破却されたというこの城の来歴を無視した完全復元が行われ、城下町にはほとんど関心が払われないなど、復元整備の技法に関して問題があることを指摘した。また、復元の歴史観に関わる問題点として、山崎期～戸田期という特定の時期への復元にともない、現在の復元された富岡城内に島原・天草一揆に関する展示は少なかったり存在がわかりづらかったりして一揆の現場であることはほとんど感じられないことを指摘した。さらに、後期天領期の準城下町としての長い歴史を評価して三の丸に陣屋を復元整備するという選択肢もありえたことも論じた。

歴史遺産の中には、過去に対する認識をめぐって複数の記憶がぶつかり合う事例が珍しくない³⁹⁾。富岡城も潜在的にはそのような場所なのである。

〔付記〕 西讃地方に生れ、丸亀城下で高校生活を送った筆者にとって、天草富岡は元丸亀藩主山崎氏の前封地として長く見慣れた地名であった。長崎に移り住み、地図ですぐ近くにこの富岡という地名を見つけた時、懐かしいような奇妙な感がしたことを覚えている。

注

- 1) 濱名志松『九州キリシタン新風土記』葦書房、1989、450頁。
- 2) 服部英雄「城郭復元無用論」（服部英雄編『アジアの中の日本（史跡で読む日本の歴史8）』吉川弘文館、2010）279-304頁、拙稿「長崎出島における復元整備の経緯と問題点」歴史地理学 56-1、2014、21-31頁など。
- 3) 苓北町教育委員会『富岡城物語（富岡城の歴史と調査・整備の記録）』苓北町教育委員会、2007。
- 4) 苓北町教育委員会『富岡城V（苓北町文化財調査報告第8集）』苓北町教育委員会、2002、76-77頁。
- 5) 「肥前国富岡城図」（静嘉堂文庫蔵）、「肥後天草之図」（鶴田八洲成蔵）の2種で、いずれも富岡城の各種報告書に収められている。苓北町教育委員会『調査報告書 富岡城（城の歴史と城跡）』苓北町教育委員会、1986など。
- 6) 前掲5) 所収の「山崎家文書」参照。
- 7) 「御徒町」とよばれる一帯で、口伝に「（慶長10年）権現山麓の御徒町等、外郭も整備す」とある。松田唯雄『天草近代年譜』みくに社、1947、4頁。
- 8) 「冬切」の読みは未詳だが、「ふうきれ」で、風が「吹き」砂丘が「切れ」ること示すか。現在、ここには海岸段丘と同じ高さの高まりが続くが、近世には少なくとも2回、大波を受けてこの付近から浸水した記録がある（1733（享保18）年と1748（寛延元）年、前掲7）139-140・158頁）。さらに明治になると炭鉱のトロッコも敷設されるなど大幅に地形は改変されており、元はもっとくびれていたとみてよい。なお、冬切は島原・天草一揆の際のキリシタン処刑地で、まさに富岡の南の出口であった。

- 9) 鈴木代官の建議によって天草郡の石高4.2万石が2.1万石に半減されたとされることもあるが、これは誤り(元の郡高37,409石余)。苓北町史編さん委員会編『苓北町史』苓北町、1985、324頁、鶴田倉造『天草島原の乱とその前後(上天草市史大矢野町編3)』上天草市、2005、50頁。なお、鈴木代官の石高半減を訴えるための自殺説は、1933年の『天草富岡回顧録』が最初で、その後流布したものという。上述の『苓北町史』、339-341頁。
- 10) 現在、瑞林寺や富岡神社がある一帯。前掲7)45・47頁。すでにこの付近(新町)まで城下町が伸びていたことを示し、「寺町」は城下町全体の構造に関わることから、山崎期の計画に基づくものと見たい。
- 11) 前掲7)75頁。
- 12) 「天草島富岡地勢要図」(天草キリシタン館蔵、1823(文政6)年)。なお、その他に「富岡城図」(浅野家文庫蔵)があるが、これは富岡を独立した島のように描き、「嚮サキ」の位置も全く異なるなど検討に値しない。所収先はいずれも前掲5)。
- 13) 人数は250人、1671(寛文11)年に一丁目上町に大小11軒の番舎を建てたとある。前掲7)76頁。
- 14) 1690(元禄3)年の大火で焼失した4カ寺が移転した。前掲7)91頁。
- 15) 苓北町企画室編『苓北町20年の歩み 苓北町合併20周年記念誌』苓北町企画室、1974、254・255頁
- 16) 前掲5)。
- 17) 「苓北町が「城下町」を観光目玉に 平成元年度から公民館、小学校体育館、物産館など」、熊本日日新聞1990年6月15日、20面。
- 18) 中桐造園設計研究所編『富岡城復元基本設計報告書』苓北町、1995、3頁。
- 19) 前掲18)76頁、ただし、①～⑤の数字は筆者が付した。なお、この報告書が刊行された当時、「肥前甘舄富岡城図」は山崎期の「城普請絵図」と考えられていた。同124頁。
- 20) 前掲3)22頁。九州電力苓北発電所(石炭火力)は1995年運転開始。
- 21) 1995年採択。なお、当初はこの予算で櫓復元も計画されていた。前掲3)21頁。
- 22) 前掲3)27頁。
- 23) 前掲3)24頁。
- 24) 「都市再生整備計画(第4回)変更 第2期富岡志岐地区」<http://reihoku-kumamoto.jp/wp-content/uploads/2015/01/c6ae46e1abc7c113ccd98d8f7683a5f5.pdf> (2017年4月24日閲覧)。
- 25) アダム荒川は1614年に処刑されたキリシタンで、天草で最初の殉教者とされる。天草中央キリスト教会『天草キリシタンガイドブック(改訂版)』天草中央キリスト教会、2016、64-65頁。
- 26) 「第3期富岡志岐地区都市再生整備計画(案)苓北町」<http://reihoku-kumamoto.jp/wp-content/.../03/de740bae2321a8ffe272c243360d53f3.pdf> (2017年4月24日閲覧)。
- 27) 前掲3)20-27頁。
- 28) こうした見解は次の新聞記事でも示されている。「苓北町富岡城の復元計画 解説＝財源ねん出に苦心の跡 住民感情と歴史、留意を」、熊本日日新聞1997年3月23日、4面。
- 29) 南島原市教育委員会『史跡原城跡整備基本計画書』南島原市教育委員会、2011、60-96頁。
- 30) 芦北町教育委員会『史跡佐敷城跡保存管理計画書』芦北町教育委員会、2013、100頁など。
- 31) 五島昌也「平和へのモニュメントとなる整備一名護屋城跡並陣跡」(史跡等整備の在り方に関する調査研究会編『史跡等整備のてびき 保存と活用のために IV事例編』同成社、2005)、60-65頁。
- 32) 加藤理文『日本から城が消える―「城郭再建」が抱える大問題』洋泉社、2016、282頁。
- 33) 「苓北町富岡城の復元計画 インタビュー＝史実に忠実に、地域おこしの核へ 田島章二苓北町長」、熊本日日新聞1997年3月23日、5面。
- 34) 苓北町教育委員会『富岡城 平成11年度調査と整備の記録(苓北町文化財調査報告概報)』苓北町教育委員会、2000。
- 35) やや離れたアダム荒川の殉教地とされる地点から記念碑を移設(2015年)。なお富岡には島原・天草一揆の処刑者の首塚もある。
- 36) 田島章二「ごあいさつ」(苓北町教育委員会『苓北町文化財調査報告第5集 富岡城跡II』苓北町教育委員会、1997年) ページなし。なお、これは富岡城に別の価値を付与してナショナル・ヒストリーに位置付ける試みでもある。
- 37) 後の2人は頼山陽と勝海舟。ただし、頼山陽の富岡来訪は疑問視されている。
- 38) 前掲7)75頁。
- 39) 拙稿「対立する記憶と場所―小港町・香川県杵臼木をめぐる歴史意識」歴史地理学46-5、2004、25-39頁、浦川和也「佐賀県立名護屋城博物館の建設と開館10年の歩み―『日本列島と朝鮮半島との交流史』の中での文禄・慶長の役(壬辰・丁酉倭乱)の展示」(国立歴史民俗博物館編『歴史展示へのメッセージ』アム・プロモーション、2004)35-68頁など。